丹羽文雄

丹羽文雄

新潮社版

日本文学全集　30

丹　羽　文　雄

発行／1967年9月15日　十一刷／1969年9月25日
発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代)　振替東京808　郵便番号162
印刷所／三晃印刷株式会社　製本所／大進堂製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社　製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1967

目次

鮎　五
贅肉　一九
厭がらせの年齢　四七
遮断機　八一
日日の背信　一七七
注解　五三七
年譜　五三九
解説　亀井勝一郎　五五三

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

丹

羽

文

雄

鮎

一

海棠と夕顔に雨がふっていた。俥屋が母の和緒の手紙をもってきたので、津田は朝からの苛立つしょざいなさを吹きとばす気で家を出た。電報で東京から呼びよせられて来たが、肝心の和緒がうちを開けはなして何処かに姿をかくしていた。大変間尺にあわない昨日来であった。

長良川が軒下にながれている或る料亭のはなれに和緒はいた。津田が熊笹の庭を渡っていくと、和緒は障子をあけた。いつものように陽気なほほ笑みだったが、どこかに元気がない。元気がないなと、少しぐいと来るものを感じて津田は目を大きくした。それで母と子の挨拶になった。

「朝はね、もう少しのところで守山と喧嘩するんでしたよ」

笑いながら、しかしその語気は刺々しかった。刺があるので、まだまだ朝の余憤がのこってい、自分はまだ慍っているのだという気が津田はした。

「籍をね、わたしの籍を守山が、守山家へいれてほしいと言いだしたんだよ」

「結構じゃありませんか」なんだそんなことかと安心するものがあったが、それはそのまま押し殺して、「電報はそのことですか」こう言ったとき津田は、まるで慍ったようにぶっきら棒であった。内心、これは本当に結構なことではないか、と座布団におさまった。

が、和緒にしてみると心外だった。自分の考えに味方をし、力づけ、助けになってくれるであろうと津田を頼みにこそすれ、まさかこうはっきり逆らいはすまいと当てにしていた思惑がいっぺんに叩かれて、もう胸いっぱいになって来る顔を暫く津田の前にじっとさせ、それから言った。

「いやだよ。いやだよ。誰がなんと言おうと籍は移し

てやらないから――」
唇を歪め、泣きだしそうな瞬きを二つ三つする。張りのあるその眸に力を籠める風だった。そうでもしなければ、和緒は津田に言い負かされる怖れがある。津田は和緒のそばにうっちゃられた「主婦の友」と、「映画と演芸」の極彩色をちょっと眩しそうに眺めやった。
「誰がいま更入籍なんて素直にうけてやるものかね。そうだろう。守山も考えなおしてみるがいいんだよ」と和緒は少しこわい顔をした。
津田は自分が叱られに来たような気持であった。
「何と言われようと移しちゃやらないよ。断るんだよ。きっぱりと断るんだよ。わたしはここを一歩も離れやしない。え、動いてやるものか」
この春、守山から津田のところへ、和緒にいい縁談の話があるがどうだという風な手紙がきた。津田はこうした問題になれていないので、どうしてよいか途方に窮した。投げ出した気でつい返事を出し遅れてしまうと、今度は和緒から、守山が何を言ってきても返事をしてはいけないと手紙が来た。それで安心して捨て置いた。守山はいま経済的に行き詰っているから自分との関係をきりたがっている。が今きられてはこちらが困る、もう少したてば暮しの方法が立てられるからという母の文面だった。和緒は池の坊の師匠の腕をもち、裏千家のこれも教えられるだけの素養がある。現に四、五人の娘に教えていた。その方法で成算が立つのであろう。
津田はこれで十数年来、和緒と妙な境遇にいる。当時やっと小学校に通いはじめた津田をのこして、和緒はある旅役者を追った。その後、一の宮、名古屋、加納を転々として、守山の世話をうけ岐阜に落着いてから数年になろうとする。和緒はまだ四十二歳、津田は十七の時のひとり子である。津田は小さいときから母のない人生に慣らされているので、母をさほど必要にしなかった。一年にこの母と子は五、六度逢う。まちがっても和緒は自分の生活を津田に話さない。話されないから津田も持前のひねくれた気遣いで、よしその気ならと非人情に、だから津田の態度は母の日陰ものを認め、安んじているかのような形であった。安んじて――この言葉には文句はあるが、肯定してもいい津

田の気であった。

そこへ、守山の細君が亡くなった。すると如何にもその時を待っていたという風に、守山が籍云々をもち出した。

和緒は津田に言うのである。

「この春のことをあの人も思い返すがいいさね。どの顔さげて、と言いたいところじゃないか。守山ったらね、信太郎、奥さんがもう駄目だと言われるようになってから、急に様子が熱っこくなって来て、しつッこいたらありゃしないの。えげつない位、てれくさいったらなかったよ。本当にわたしはもてあましたよ。まるで獣みたいに、夜も昼もみさかいがつかないので、女中の手前、出入りする娘さんの手前、わたしは何度赧い顔をしたことだろう。恥ずかしいったら、男も年をとると、することなすことが露骨で、脂っこくってね——」

若し世間の健全な人々がこうした言葉を生みの母の口から聴かされる場合、聴手はいったいどんな顔をして聞くべきものか、と津田は考えた。するとこつんと来るものがあった。津田は苦笑でごまかした。

先ず、守山という人間は——

「わしは気が短い。いつもあとで後悔しているほど気が短いんだよ。かっとなると、何をしでかすか判らない。時どきそんな自分が怖ろしくなる。だから若しお前がわたしを裏切ろうものなら、わしはきっと骨身に応えるほどお前に思い知らしてやるだろう。何も今更信太郎の意見をきくまでもないんだから。そうだ、わしの顔に泥を塗るような真似をしたら殺しかねないよ」

と言ってのける性格なので、和緒はすっかり震えあがったのである。全く殺しかねない守山であった。

だから早速和緒は逃げだした。発見されたら殺される気で、かくれた。そして津田に電報をうった。

津田が和緒の家についたとき、雨がふっていた。守山が疲れた人のように、雨の脚を眺めて頑張っていた。津田が挨拶すると、

「あまり和緒を唆かさないでほしいよ」と頭からだった。

守山にしてみると、説明の煩瑣をはぶいた訳である。が津田はなにも母から今度の報告をうけていな

い。母の留守にも深い理由を嗅ぎだせないのである。津田は静かに、どうして自分がそんな悪者であるような言い懸りをされなければならないのかを尋ねた。

「困るな。こんな場合に白らっぱくれて、お互の気持を悪くするだけだからね」

津田は重ねて呆然とした。

「まあ三人で逢い、ゆっくり相談するより仕方がないよ。この場合肝心の和緒がいなくては始まらないよ。あんただけでは心細い問題だからね」

語尾を苦笑に収められた瞬間、津田はぐっと怯える気持でいっぱいだった。が僅かに、和緒の五年間の生活を思い返し、蒼くなるだけで済んだ。津田は平常、自分でも十分気がながいとは言えないからである。

母親は言う。

「それで、お前はどうお思いだい。やっぱりわたしは守山へ入籍するのが本当なのかしら。あそこを死場所と定めて、生涯をきめてかかるのが本当なのかしらね」

やるせない表情をする母を眺めて、このとき津田は少しほかごとを考えていた。津田は母の十七の子供であることを思い出している。まるで姉弟だ。人一倍大きな自分に小柄な和緒は姉の形である。かつて母と子は柳ヶ瀬を歩き、和緒が若い男と一緒だったと噂をまいて守山をやきもきさせ、それをしんから和緒は可笑しがったが、津田はそれだけではすまされない苦い水を感じた。母と子の差別の具体化だ。津田はいつも十七からの母の役割を気の毒に思っている。津田は小さなころよく泣いた。泣いて泣きやまないと、どうしてあやしてよいものか、心細くなって十七の母は、津田を膝にのせてああんと一緒に泣きだしたものである。すると姑は、先ず小さな母親からあやしにかからねばならなかった。

津田は応える。

「こうした問題は一時的感情できめるのは危険ですよ。守山の人格は第二のことでしょう。将来のどうせ母さんと一緒になれない僕たちの世間もよく考えて、母さんの老後の安定という物質的な立場から、いくらか狭くこの問題は極めるべきでしょうが」

「それで、お前の考えは」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「母さんの気持が肝心ですよ」
「いいえ、お前の意見では――」
「母さんは」
こいつ狡いな、と自分を感じた刹那、和緒は突然両手をつッ張り立上がってきた。不意だった。津田はひとたまりもなくどしんと床の方へぶっ倒れた。
「この薄情もの。親にむかって何という情知らずをお言いだい。薄情もの奴、卑怯者――。負けはしないぞ。言い負かされはしないぞ。負けてなるものか」
全く防ぎようがなかった。和緒の小さな拳固が、津田の鼻さきをつづけさまに飛ぶ。腕を烈しく上下させて母はぜいぜい息を切らした。津田は一度、したたかに曲った自分の鼻を感じた。
「そんな無茶な、そんな無茶な――」
こう言って津田は、自分の顔の上にかむさってくる和緒の体の崩れるのを支えた。
「お前はこんなとき、わたしを責めるんだ。今まで何も言わなかったけど、腹の中ではしょっ中わたしを虐めどおしていたんだろう。そうだろう。だから今となって、ひとが落ち目になったからって――」
胸倉をとらえ、小突きまわす和緒の腰に、津田は両手をあてがっていた。潤んだ眸を見かえして、あながちこの母を虐め通してきたのではないが、まんざら虐めなかったのでもないと思った。
「誰が負けてやるものか。負かそうなんて薄情だよ。情知らずだよ。わたしはこれで、誰にも頭を抑えられてはいないんだ。――なんだ。そんな頭髪をわけて、偉そうに、柔道二段だってちっとも怖かないよ」
津田は静かに居ずまいを直す。そして、世にも情ないという顔をして、
「ぼくの言い方が気にさわったら堪忍して下さい。ぼくは寧ろそう考える方が、いちばんいいんじゃないかと思ったんですが」
と言う。しかし凡そ、詫びるという気持とは相違して母の顔を眺めていると、朗かな当惑感がごろごろと津田の胸の中をころがるようであった。何か、やわらかい肉感的な当惑である。
「後生だから、ね、信太郎、そんな風に言わないでおくれよ。わたしのして来たことは確かによくなかったよ。それは十分判っているよ。でも、今となって責め

るなんて、あんまりだよ。あんまりひどいよ」
　眸が光り、濡れてきた。そら来た、と逃げる気持で、しかし泪はやはり痛かった。がこれで、母の発作も運びよせられる処まで行きついたと考えた。その出鼻へ、いきなり「主婦の友」が飛んできた。雑誌は津田に身をかわされて、模糊として山静かなり花の山、という掛軸につき当った。津田はすぐ、まるで子供に玩具を拾ってやるという風に雑誌を拾いにかかる。すると、和緒が膝をつめてきた。そんなもの静かな、動じない津田のようすに腹を据えかねるのである。
「わたしはこれでも、今日の日まで気の休まるという時はなかったんだよ。お前を捨てて家出した罰はもう十分にうけているよ。もう沢山するほど苦労して来たよ。長い間だったよ。その間には、若し自分さえその気になるならわたしは何時だって幸福になれたんだよ。暢気をしようと思えば、いくらでも太平楽がきめてもいられたんだよ。何のためにわたしが今日まで苦しんできたとお思いなのだい。みんな子供が可愛いからじゃないの。お前さえ初めから捨ててかかる気だったら、母さんはどんなにも結構な身分になれたんだよ。それが判んないのかい。大学校までいって、そんな親の切ない心が読めないのかい。親にむかって偉そうに意見するのが子供じゃないよ。わたしはお前が可愛いから白を切って守山へ行けないんだよ。若しわたしが守山の人間になってごらん。一年に五、六回しかお前に逢いたくても逢えないのに、それ以上はたの人達に気がねをして、思うように逢えないじゃないの、今だって、母さんは、逢いようが少ないと思っているのに——それも、先にお前と一緒になれる見込みがあるのなら嬉しいよ。でも、お前には、異ったお母さんがある。一ト月とお前とわたしは一緒にはいられない義理合じゃないの。——なんと言う親不孝をお言いなのだい。ここの道理が、こんなこと位判んないのかい。判っていても判らない顔をして、そうだよ。お前はまだわたしを虐め足りないと思っておいでだろう。さあ、はっきりと言ってごらん。母さんの口からこんなことまで喋らせて、さあ、言ってごらん。はっきりと応えてごらん。人を虐めるにも程があるよ。ひとが落ち目になっているのをつけこんで——、ええ、口惜しいよ。口惜しいよ」

津田は、があんとうちのめされた。母に対するこれまでのいろんな気持の痛手や、淋しさやるせなさがいっぺんに蘇ってきた。ひねくれた持前の虚弱さが、洗いたてられたような気がした。吊しあがった可愛い目もとから、泪が堰を切りぼろぼろと落ちて来た。泣いている母はまるで子供だ。そんな子供々々した母が、津田は訳もなく好きになるのだが——

その時である。庭石をこちらへ近づいて来る誰かの足音がした。津田は母の手をとると、

「さあ、早く顔をふきなさい。ここはうちじゃありませんよ。ほら、誰か来たじゃないの」

しかし和緒は濡れたままの顔を、やがて開くだろう障子の方へぼんやりと向けていた。黙って顔を見せたのは女中だった。

「遅くなってすみません」そう言って女中はすぐこの場の変な空気を嗅ぎつけたように、

「あとはすぐ只今——」早々に引退っていった。

鮎の魚田である。盃洗の水が場所ちがいのように揺れていた。途中にはいられて、津田はやれやれと思うのである。が、

「お前はいつもわたしを黙って眺めていたね。それが怖かったよ。何よりも怖かったよ」

「そうですか」と津田はちょっと目のやり場を探した。「母さんの心に、そんな考があろうとは考えてもみなかったのです。浅薄でした。今まであまり子供らしく、非人情ぶって生意気でした。これからは決して母さんを虐めませんよ。何とかいい方へ向けましょう。これからはぼく、大いに努力しますよ」

誇張したものの言い方も、仕舞いには実感をもって来、津田は晴々しい気になった。

「さあ、お飲みよ」

酒は富久娘、生一本、母のお酌で盃をあげた。

「誰だってわたしのような運命を望みはしないよ。でも、一度足の向き方がまちがってしまうと、容易に真直ぐにはもどってくれないのだよ。気ばかり焦ってね。もっとも女のひとりぐらしがどういうものか位、お前にはよく判っているだろうけど」

「判りますよ。しかしその判り方が、母さんの思い通りな判り方でなかったからって、判ってない訳じゃありませんよ。母さんの不満はこの判るということの客

観的なのと、主観的なのとの相違にあったような気がするんだけど」
　餉台の端が気短かにちょっと鳴って、母は再びこわい顔をした。
「もっと身入れて――」
「はい」と応えた津田は、「入れてますよ。親のことじゃありませんか」と笑った。
「それでいて籍を入れろとお言いかい」
　和緒の口調は鉄のように固く、冷ややかであった。津田はとうとうしてやられたような気がした。が刺を覚えない気持で、また何事も逆らうまいと思った。この母には賛成だけが必要である。津田は言った。
「守山のことは、何とか解決しますよ。併し、手切れにどうのこうのと言い出しては厭ですよ」
「誰がお前そんなこと言うものかね」
　髷を眺めやって、ふと守山は可成り大きな体格だったっけなと津田は思った。
「いざとなれば何もかも守山にくれてやる覚悟でないと駄目ですよ」そう言って厳格な顔をした。
「あの人のものは五、六本の軸とそのほか骨董物が少少あったかしら。それだけだよ」
　そんな話の種類より、この場合津田は魚田をつづいている方が遥かに気が楽な訳だったが、――津田は守山を描いた。交渉を引受けたものの自信がない、気になった。
「勿論、今後絶対にこれまでのような生活は絶っていただけるでしょう。焼棒杭にまた火がついちまったなんて、厭ですよ」
　そう言って津田はこれは厭な言い方だと赧くなった。熱い気がした。素直に自分の言葉に頷く母を眺めて、もう一度赧くなった。
「わたしも、もういいおばあさんだからね」
　その四十二歳を、本当に津田は信じかねるのである。更に本能の過失を重ねるだろう和緒を、和緒自身より津田の方が慥かと予言出来るからである。この春の出来事がそれだ。体よく捨てられようとして、またうやむやにもとへ戻って、その後母は別れようともしなかった。母が弱いのか守山が烈しすぎるのか、そのどちらでもあろうと考える津田の目にうつる平常の和緒は、若くて、あまりに端麗すぎる。津田は和緒と永

い間母と子の生活をもたないで来たその所為(せい)か、和緒を母として見るよりも、とき時、ひとりの女として眺めている。不埒(ふらち)な息子だ。津田は母の美貌を恨むなど、そんな芝居気は持たない。むしろいつまでも、若く美しくあってほしいと望んでいる。——並んで立つと漸く自分の肩に鬢のとどく、関西風な大きな、豊かな前髪。黒く大きな瞳。鋭い日本人ばなれした横顔。小肥りに皮膚がすんで青味をもつ肌。自分を打つときのいっそう扇情的な母親。全身で毬のように武者ぶりついてくる血の気の多い母。感染しやすい快活と移り気でむずついていそうな、婀娜(あだ)な母——それ故に、久振りに逢う津田は、母をそっと味わっているような風があった。

当分は、池の坊と裏千家で生活の道はつづけられていくだろう。が四十二歳が、いずれ第二の守山を作るのである。寧ろ作らない方が嘘だと津田は考える。津田はこうした考え方を恥じるまいと、己(おのれ)に言いきかせ、それで承知する自分の気であった。一年に五、六回、逢ったときだけが母である。余日の母は、女としての組の方へ入れて置きたい。が、こう考えるのも永年の別々の生活の故だろうと、考えて佗しく、何ともいたし方のなさで、棚の上へという風にかたづけて、津田は大して良心の笞(しもと)も感じないのである。

長良橋を津田がかえるとき、金華城上の月は高くて、あくまで明るかった。

二

二十代の自分が親の痴情をさばかねばならないなど、不幸なことだと、苦味とやるせなさを何時幾度逢おうと、もの別れになる守山との交渉のあとさきに味わわされて、五日目だった。

津田は法善寺の朝の梵鐘(ぼんしょう)を聞きに出かけた。守山の目をごまかすために三日置いて、昼近く帰って来ると、隠家に居る筈の和緒が先ず津田を迎えた。

「あの人が自殺したんだよ」

えっ、と言うほどの愕(おどろ)きである。

「わたしの居所が判らないので、あの人は毎日わたしを探してまわったんだってさ。名古屋へも四日市へも、一の宮へも、自分で出かけるという熱心さで、それでもとうとう判らないとなって、朝からむちゃくち

ゃにお酒を飲んで、よっぱらったそのあげく猫いらずを二十瓦(グラム)呑んでしまったんだよ。胃袋をさっそく洗浄したんだけど、二日間お腹にあるものがお酒ばかりで、心臓麻痺をおこして昨日とうとう死んじまったんだよ」

自殺がぴんと来ないのである、嘘のようだと考えた時、津田は母の顔をぼんやり眺めていた。

普段着と着換えて、再び和緒とむかい合った時、津田の心のなかに興奮してくるものがあった。

「お葬式は？」

「今日の午後二時と聞いているんだけど」

「当分、うちを出ないようにして下さい」

頷くのを見、津田は急激にくる息切れのようなものがあった。自分の頬の冷たさを感じた。

「灯台もと暗しって、よく言ったものだね。あそこにいたのにとうとう判らず終いだった。そのくせ、あの人は二、三度あそこへもやって来ていてね。見つかったらきっと殺されていたよ。捉えられてごらん、猫いらずの半分は大丈夫飲まされたに違いないよ」

津田は、そんな母の顔を見るにしのびなかった。津田は死という重い事実をいくとおりに考え直しても、素直にその言葉のもつ実感が得られないのだ。どこやらにうしろめたい感じが残る。まるで我がことのように気恥ずかしいのである。また母に対しても、何故自分が気まりの悪い思いをしなければならないのか、妙な気だった。和緒は落着いている。和緒は少なくも自分がことの焦点に置かれているということを気にかけていない風である。粧(よそお)った無神経なのか、津田には判らない。が一応は、その平静を認めねばならないほどの静かさであった。

この母は、守山の死を嗤(わら)っているかも知れなかった。まったく人々をほろりとさせない、肩身の狭い死に方である。生命の脆さを思うより、軽蔑が先に立つ。しかし津田には一概に笑い切れないものがあった。和緒のようにすましてはいられない。津田は自分でも十分非人情であると構えているが、この暗鬱な感じは、理不尽な自殺の事後の答にちがいなかった。その答を一体誰が受くべきか、母か——むろん和緒である。津田はそんな責任はもちたくなかった。持つ意志もないのに、この弱り方は何故なのか。癪だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com